

1. はじめに

1-1 災害教訓伝承の必要性、目的は

(1) 災害教訓伝承の現状と必要性

天竜川上流域には、過去の災害にまつわる歴史資料、石碑・遺構、民間伝承が数多く残っている。これらの歴史資料、地物、伝承内容は、災害の脅威や対策方法を後世に伝え、豪雨災害時の地域防災力の底上げや、被害軽減に資する貴重な資源である。しかしながら、これらの資源が地域防災力の底上げに十分に活用されているとは必ずしも言えない状況にある。その問題点として以下のことが考えられる。

- ① 災害を経験したことにより得た教訓（知恵、知識）が十分に伝承されているか、また活かされているかが認識されていない。
- ② 過去の大災害等については、災害経験者の高齢化等に伴い、災害に備えるための知恵や教訓が後世に語りつがれないことが懸念される。
- ③ 地域に残存している歴史資料や石碑・遺構も、伝承の観点で要領よく整理されておらず、経年とともに散逸や風化のおそれがある。
- ④ 近年に見られる気象変動による集中豪雨など、治水事業の計画水準を超える洪水に対して、被害を軽減するためには、正しい知識に基づき、自らの身を自ら判断して守る、近くの人を助け合って守る、自助、共助による災害対応の重要性が高まっている。しかしながら、仮に災害教訓が伝承されず、自らの住む土地に対する正確な情報・理解を住民が有さない場合、災害時の避難行動や行政による災害対策活動の実施、また平常時における治水事業の実施などの面で大きな支障となることが懸念される。

以上のような問題認識から、天竜川上流域において災害教訓伝承の必要性・目的は以下のように整理される。

過去の災害にまつわる史料の散逸・風化や、災害経験者の高齢化が進行するなか、官民が適切に役割分担、連携を行いながら、地域全体として災害教訓伝承に対する取り組みを推進し、地域の自助・共助を後押ししつつ、地域防災力の向上を図ること。

(2) 天竜川上流における災害教訓伝承手法検討の取り組み

上記の問題点をふまえ、国土交通省天竜川上流河川事務所では、平成19年度から20年度にかけて、天竜川上流域を対象に、既往災害における教訓の実用的な伝承手法の検討を行った。検討の実施にあたっては、「天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会（座長：笹本正治信州大学教授）」（以下検討会とする）を設置し、全4回の検討会を経て災害教訓の調査、記録、伝承のあり方についての検討を行った。

検討会の全体の流れは図1に示す通り、①まず、流域内で過去に起こった災害や現存する災害教訓・伝承を文献や災害経験者へのヒアリング等を通じて掘り起こし、②調査結果を今後の伝承活動に活用できるようビデオ、カルタ等の試作品としてとりまとめた。③一方で、

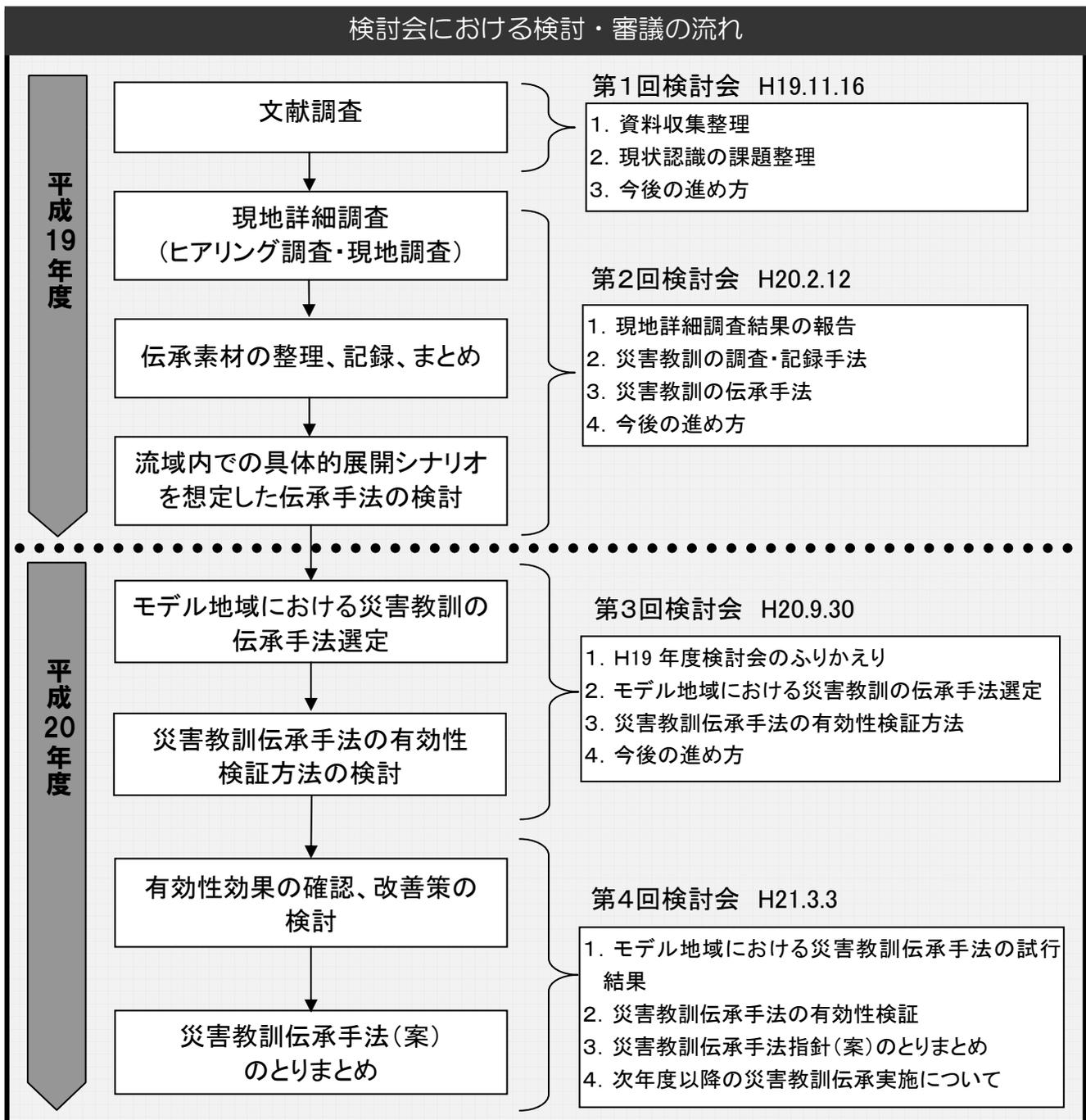


図1 検討会における検討・審議の流れ

災害教訓伝承活動を実施していく際に考慮すべき、訴求対象の考え方や伝承手法の考え方について整理した。④次に、伝承手法を実際に試行する 3 つのモデル地域を選出し、各モデル地域で行う伝承手法の企画・設計を行ったうえで、⑤合計 5 つの伝承手法を実施した。⑥実施にあたっては、参加者アンケートを実施し、その分析を通じて、個々の手法の有効性を確認するとともに、⑦今後の継続的な活動に向けた方向性に関する検討を行った。本書は、上記の検討会での取り組みをまとめたものである。

(3) 確実な災害教訓伝承のためのポイント

今後確実な災害教訓伝承を行う上で考慮すべきポイントを以下に示す。

- ① 流域内にストックされた災害教訓を、どのようにして地域特性を的確に反映させながら伝承し、地域に定着させればよいのか
- ② 災害体験の有無、年齢、社会的な立場等の違いにより、個人には多種多様な災害に関する意識・行動があるなか、どのようにして伝承の対象者（訴求対象）の特性を捉え、どのような手法や内容であれば災害時に真に役立つ教訓として伝承されるのか

上記のポイントを考慮しながら、本書（サイト）では、実用的な伝承手法の実施方法を示す。

1-2 本書(サイト)の目的と利活用

(1) 本書(サイト)作成の目的

本書(サイト)は、上述した検討会での討議内容を踏まえつつ、天竜川上流域での災害教訓伝承活動の実施成果を基に、災害教訓伝承の実施方法を「天竜川上流域 災害教訓伝承手法実践の手引きと実例(案)」としてとりまとめ、天竜川上流域で有効かつ継続的な災害教訓伝承活動の実施に資することを目的としている。なお、本書(サイト)は伝承試行結果の成果を基に作成したもので、今後災害教訓伝承を継続していく中で有効性検証を続け、より効果的な手法が見つかった段階で改訂を行い、内容をレベルアップさせていく予定である。

本書を利用し、実際に災害教訓伝承活動を行われ、手法の改善点やより有効な手法を見つけられた方は事務局までご連絡いただければ、改訂の参考にさせていただきたいと考えています。

(2) 本書(サイト)の内容及び利活用の方法

【対象者】

- 本書(サイト)は、地域の災害教訓を伝承したいと考える自治体職員、あるいは自主防災組織のリーダーや教職員など地域の防災を担う市民を対象とし、流域内に存在する災害教訓伝承や次世代に伝承していく活動の進め方を示したものである。

【対象地域】

- 本書(サイト)は、今回行った天竜川上流域での活動成果をもとに取りまとめたものであり、今後、天竜川上流域で災害教訓伝承を実施する際の参考となるよう取りまとめている。ただし、災害教訓伝承活動の進め方については、他流域で実施する場合にも、参考になるものがあると考えられる。

【全体構成】

- 本書(サイト)は、次の2つの内容から構成される。

1) 流域に存在する災害教訓事例

- 既往災害の実態
- 流域内の災害教訓事例
- 伝承ツール

2) 災害教訓伝承実施の流れ

- 個々の伝承手法の企画、実施
- 伝承活動の有効性の確認

- 災害教訓を伝承したいと考える方々の知識や経験に応じて本書(サイト)を活用してもらえよう、単に伝承手法の企画・実施についてだけでなく、その前段として今回の検討会で調査した流域の既往災害記録や災害教訓・伝承についてもとりまとめた。
- 本書(サイト)は本編と資料編に分けて構成されている。本編では今回の活動成果を概括しながら災害教訓伝承の実施方法をマニュアルとして記載しており、資料編では、より詳細な資料、データ等を記載している。



【活用上の留意点】

- 災害教訓伝承手法の企画・実施では、今回の資料調査、ヒアリング調査の結果や、作成した伝承ツールなどの成果を紹介しながら、各地域での計画に容易に着手できるよう留意した。
- 災害教訓を伝承する手法としては、書籍、紙芝居などの印刷物やインターネット、現地見学会や講演会などのイベント、マスメディアの活用など多様な手法があるが、本書（サイト）では、実際に目で見たり現場を歩いたりする手法の有効性や子どもたちへ災害教訓伝承の重要性など、検討会の中で出された意見等を踏まえて試行された、以下の5つの伝承手法について詳述している。



1) 災害教訓伝承授業

小学校の授業において、雨や災害の恐ろしさ、自分たちが災害時にできることなど考える学習活動の実施

2) 災害教訓伝承講座

地域の公民館活動を利用して、災害に関するお話が残る場所をめぐる災害教訓伝承講座の実施

3) 伝承遺構見学会

天竜川に残る土木遺構、災害記念碑、災害にまつわる言い伝えのゆかりの地など、地域に残る過去の災害の痕跡をめぐる現地見学会の実施

4) 災害教訓伝承パネル展

市町村が行う防災関連イベントと連動し、過去の災害や地域に伝わる災害教訓を紹介するパネル展の開催

5) 防災カフェ

不特定多数の人々が集まる公共公益施設で、災害に興味のない人でも気軽に立ち寄れる防災イベントの実施

- 上記の手法の中には、例えば、「防災カフェ」では、防災に関する対談や災害体験談の朗読、防災カルタ・クイズ大会など、同時に複数のツールを使用しているものもある。
- 今回の活動では、個々の伝承手法の有効性を、参加者へのアンケート調査や実施主体の振り返りにより確認した。アンケート調査については、参加者の負担の軽減や回収率の向上等を考慮し、極力簡易なものとし、その中で有効性確認を試みている。調査方法や調査票の創意工夫により、本書（サイト）に記載したものと違った視点で有効性が確認できるものと思われる。